

【東京】在宅注カクリニックが外来重視の分院を作った理由-山口潔・医療法人社団創福会理事長に聞く◆Vol.2

2021年10月22日（金）配信 m3.com地域版

「高齢者総合支援診療所」をテーマに在宅医療に注力する医療法人社団創福会は2021年5月、分院となる「ふくろうクリニック自由が丘」を開いた。山口潔理事長はなぜ、外来診療とリハビリテーションを重視するクリニックを新たに作ったのか。「ケアラー外来」「社会参加外来」などの珍しい専門外来の内容、医師以外の医療者が活躍する仕組みも聞いた。（2021年8月20日インタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回はこちら

▼第3回はこちら

——医療法人社団創福会は在宅医療に注力する「ふくろうクリニック等々カ」を2013年から運営していますが、これとは別に、2021年6月に外来診療とリハビリテーションを重視する「ふくろうクリニック自由が丘」を開きました。なぜ、直線距離1.8キロメートルほどと近い場所に外来注力のクリニックを？

ふくろうクリニック自由が丘（以下、分院）は脳神経内科、脳神経外科、整形外科、リハビリテーション科、家庭医療科、精神科を標ぼうしており、神経内科と認知症の専門医である橋本昌也先生が院長を務めています。MRIなどの検査機器を備えるほか、2階にはリハビリテーション室もあります。

私が外来中心のクリニックを作ったのは、介護が必要になる前の高齢者を診ていきたい思いがあったためです。ふくろうクリニック等々カ（以下、本院）で行っている在宅医療の対象になりやすいのは要介護高齢者なので、外来注力のクリニックを作ることにより、より広い意味で当法人がテーマとする「高齢者総合支援診療所」を実現できるのではないかと考えました。

分院の一つのポイントが、整形外科を標ぼうしていることです。私は要介護認定を行う介護認定審査会の委員を務めており、この仕事に携わる中で、審査対象の人たちにある共通点を見つけました。それは、骨粗しょう症や変形性関節症などの整形外科疾患を発症して数年たった後に認知症が起り、要介護になっていく状況が少なくないことです。つまり、整形外科を標ぼうし、そこに来た患者さんに同科の診療を行いつつ、認知症の啓発もすることで要介護予防を図れるのではないかと。こちらのクリニックにはMRIがあるのですぐに認知機能の検査ができ、本院では私を含めた専門の医師がもの忘れ外来を行っているので患者さんは遠くの医療機関に行く必要がありません。

私が重視する「医療の継続性」（詳細はVol.1を参照）をさらに高めた形です。



山口潔理事長（法人提供）

——分院ではリハビリテーションにも力を入れているそうですが。

はい。認知症の治療は非薬物療法も重要だと私は考えており、その代表格であるリハビリテーションを行う場所がほしいと前から思っていました。そこで、まずは本院にリハビリテーション部を立ち上げて専門スタッフを雇用し、通所リハビリと訪問リハビリを始めました。そして、分院ができた後に通所リハビリのスペースをそちらに移しました。現在は5人の理学療法士、作業療法士、言語聴覚士がリハビリに携わっています。

分院で行っているリハビリの特长は、神経疾患に対応していることです。一般的に地域のクリニックで行っているリハビリの多くは整形外科疾患に対応するものですが、分院では認知症や脳卒中などの後遺症として起こる高次機能障害などのリハビリに力を入れています。実際のところ、患者さんには整形外科疾患と認知症の両方を抱えている人が多いのでリハビリの内容は複合的になりますが、この特色もまた高齢患者さんのニーズに応えるものになると思います。

——同法人はさまざまな専門外来を開いています。中には「ニューロフィットネス外来」「診断後支援外来」「ケアラー外来」「社会参加外来」という珍しいものもありますね。

当法人は認知症、がん、フレイルへの対応に力を入れており、「もの忘れ外来」「フレイル外来」「がん緩和ケア外来」「がんメンタル外来」など各種専門外来を開いています。

質問にあった四つの専門外来は最近増やしたものであり、先述した認知症の非薬物療法の文脈とつながります。まず、ニューロフィットネス外来は「ニューロ」と「フィットネス」を合わせた造語であり、認知症予防に関心のある人向けに各種検査などを行っています。診断後支援外来は、「認知症や高次機能障害と診断されたけれど、これからどう生活していったらいいかわからない…」といった人と話し合い、療養計画を立てていくもの。ケアラー外来はがんや認知症などの患者さんを支えているご家族などのケアを図るもの。社会参加外来はデイサービスに行きたがらない人などに対し、社会参加に向けた土台作りを行うもの。診断後支援外来とケアラー外来、社会参加外来は公認心理師が担当しています。

——医師以外の職種が担当する専門外来があるんですね。多職種が在籍する法人の強みを生かした展開だと思いました。

「医師以外の医療者にどう活躍してもらうか」は私が経営者としてよく考えていることです。先ほどは公認心理師の例を挙げましたが、薬剤師の存在意義をもっと高めたいと考えています。当法人では医療の安全を守る意味合いで薬剤師に処方箋のチェックなどを行ってもらっていますが、現在、活躍の幅を広げようとしているところです。

その場として機能を充実させようとしているのが、予防医療を目的とした「予防医療ステーション」です。こちらは薬剤師が運営する新しい部署であり、先に挙げたニューロフィットネス外来やフレイル外来などにおける非侵襲性の検査や生活指導を行うほか、サプリメントなどに関する企業の臨床試験を受託しています。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行によってまだ活動が進んでいませんが、今後は健康関連イベントなども開いていきたいです。

個人的には、病気の予防や風邪などの軽症の治療はもっと薬剤師が介入するようにして、医師が重症の病気の治療に専念できる仕組みを作っていった方が良く考えています。

——面白いです。国は医療費の抑制も兼ねて薬剤師の活用を模索しているようですが、地域で進んでいると思いませんか。「薬剤師が幅広く活躍する医療機関」が生まれれば、全国的な注目度が上がるのではないのでしょうか。

◆山口 潔（やまぐち・きよし）氏

1999年浜松医科大学卒。2007年東京大学大学院修了。専門は老年医学。自治医科大学附属大宮医療センター（現自治医科大学附属さいたま医療センター）の神経内科・総合診療科を経て、東京大学医学部附属病院の老年病科で認知症など高齢者の病気の診断と治療に携わる。「高齢者総合支援診療所」を作りたいと2013年に「ふくろうクリニック等々カ」を開院。2021年5月には分院となる「ふくろうクリニック自由が丘」を開いた。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

